

偽史言説としての『西田幾多郎全集』（1947年）購入徹夜行列

——教養文化史再検討のために

基礎教育学コース 松 井 健 人

The All-Night Queue to Purchase the Complete Works of Kitaro Nishida (1947) as a Pseudo-historical Discourse: Toward a Reexamination of the History of Culture

Kento MATSUI

This paper examines the reality of the all-night queue to purchase the first volume of the complete works of Kitaro Nishida. This queue was a phenomenon that has been repeatedly interpreted as a "hunger for the printed word" and a "yearning for culture". However, these interpretations do not examine the historical context. This paper considers various historical circumstances, including the publishing situation at the end of the war. As a result of this paper, it is highly probable that the queue was composed of people who were eager to resell the book.

目 次

1. 問題の設定
2. 先行言説の検討
3. 神田岩波書店前，1947年7月19日午前2時
4. 『西田幾多郎全集』購入徹夜行列をめぐる歴史的状况
 - A. 偽『善の研究』の流布
 - B. 投機の商品としての古本・店舗販売のみの販売体制
5. 戦中・戦後直後期における西田幾多郎『善の研究』の位置価値
 - A. 教養の古典としての『善の研究』
 - B. 戦中の西田幾多郎とそのイメージ像
6. 検討・『西田幾多郎全集』購入徹夜行列とは何だったのか？
7. おわりに

1. 問題の設定

本稿は、教養文化を論じる際に、繰り返し引用される言説・事象である、「終戦直後期の西田幾多郎全集第一巻を購入するための徹夜での行列」(図1)の内実について検討する。この朝日新聞にて報道された『西田幾多郎全集』への行列という現象とその写真は、専門書に限ってもジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』や近年では福間良明『「勤労青年」の教養文化史』な

どで言及されている現象であり、教養主義文化を検討するために有益な検討対象である。当時の新聞記事や雑誌記事・文献を検討する文献調査に基づいて、この現象の内実について実証的に考察を行ってゆきたい。

ここで標題の「偽史言説としての」について触れたい。1947年7月19日の『西田幾多郎全集第一巻』購入行列そのものは、歴史上確かに発生した出来事である。この行列という現象を「史料批判という近代学問上の手続きを経て抽出された蓋然性の高い歴史的事実¹⁾」として捉える試みを行うこと無く、教養称揚・



図1 『西田幾多郎全集』購入徹夜行列を報じる朝日新聞記事²⁾

読書称揚・人文書称揚といった一方的な言説資源・エピソード言説として繰り返し浪費する様相を指して、「偽史言説としての」と本稿は記述している。無論本稿のタイトルに象徴されるように、結論を先取りしていえば、『西田幾多郎全集』購入徹夜行列は、「活字への飢え」や「教養主義」といった従来の解釈枠組みに収まるものではない。この行列は、終戦直後期の出版状況・古書市場・戦中期より続く西田幾多郎『善の研究』の受容状況といった、これまでの言説が見落として来たさまざまな背景要因・歴史的状況がかさなりあって発生した現象であった。

2. 先行言説の検討

西田幾多郎に関する研究は言うまでもなく膨大であるものの、この1947年の『西田幾多郎全集第一巻』（『善の研究』と『思索と体験』が収録されている）への購入徹夜行列に関する研究は、これまでもほとんどなされることがない。というよりも、この徹夜行列は、戦後直後期という紙資源や食料が不足する状況においても人々が活字を・哲学を・教養を追い求めた象徴であるという解釈枠組みのもと、エピソード言説として言及ならびに消費されてきたものであった。

例えば、『善の研究』に関する入門書・啓蒙書においても、先の1947年7月19日の写真を提示して、「写真を見れば、当時の人々がこの西田の哲学を渴望した様子がよく分かると思います」ならびに「飢えた人が食べ物を求めるように叡智を求めた。そんな時代が、70年ほど前にはあったのです」として、活字あるいは哲学への渴望がまだ存在した時代への懐古を象徴するものとして言及されている³⁾。

あるいは、この『西田幾多郎全集』購入徹夜行列は、「新しい本への飢餓感」あるいは「大正教養主義の記憶」と結びつけて解釈されてきた⁴⁾。ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』においても、エピソードとして言及される形で、徹夜行列の写真を「活字への飢え」として解釈されている⁵⁾。

この購入徹夜行列についても言説によっては記述の揺れがあり、奥武則は行列を1500人に及んでいたと記述し「活字に飢えていた時代」として解釈している⁶⁾。また小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉』においても、「1947年7月に、岩波書店から『西田幾多郎全集』の第一巻が発売されたときには、約1500人が三日前から岩波書店前に行列をつくり、路上に寝て発売を待ったという」と記されている⁷⁾。なお、さきに記せば、1500人

という人数把握は誤っており、三日前からぼつぼつと大学生らが並びはじめ、路上に徹夜した人数は二百人あまりであったというのが当時の状況であった（詳細については3節を参照）。また半藤一利が、当時の「文芸春秋」編集長の鷺尾洋三の回想として記すには、「将校服あり、つぎはぎだらけのジャンパーあり、だぶだぶの国民服あり、さまざまな服装をした若ものが岩波書店の前からはじまり、えんえんと駿河台の方までならんでいた⁸⁾」という⁹⁾。

近年の研究である福間良明『「勤労青年」の教養文化史』においても、やはり行列は「西田幾多郎の難解な哲学を理解できなくとも、それに接したいという人々の教養への憧れ」として解釈されている¹⁰⁾。

あるいは、西田幾多郎の浩瀚な評伝である大橋良介『西田幾多郎』においても、この行列に関して「その人々は「一時は万一国不運の時もあるも必再起 [] (...) 本当の日本はこれからと存じます」という西田の語を、聞きたかったのだろう」と記している¹¹⁾。無論、引用箇所はややレトリカルな記述であり、この時発売された『西田幾多郎全集第一巻』に収められているのは『善の研究』と『思索と体験』であるので、そのような言葉（先の一節は、もともと高坂正顕宛の書簡内の言葉である）が記載されているはずもないのであるが、ともかく、西田幾多郎を素朴に追い求めたのだと解釈しているといえる。

この行列に関して、これまでで最も精緻な同時代状況を記述したのが佐藤卓己によるものである。佐藤卓己は『物語岩波書店百年史 2 「教育」の時代』の中で、この『西田幾多郎全集第一巻』購入の徹夜行列の写真を取り上げ、「人々はまさに活字に飢えていた」と記す。同時に、「西田の哲学がわかる人が日本に何人もいるとは思われないのにこういう不思議なことが行われたのである」と回想する小林勇（1946年より岩波書店支配人）の言を引用している。さらには、同じく小林の言葉を引用しつつ、『西田幾多郎全集第一巻』購入徹夜行列に似た現象が、『野呂栄太郎全集第一巻』発売当時（1947年4月12日）にも発生したことにも触れている。当時の『世界』編集者が日記に記すには、「『野呂全集』の第一巻を、けさ、小売部で売り出した。[引用者中略] 午すぎには、はや二百円になって古本屋の店頭に出たという。定価は六十円である。なんとというペラボーな話だろう¹²⁾」という状況であった¹³⁾。このように佐藤卓己は、『西田幾多郎全集第一巻』購入徹夜行列が、古本転売と関わり得る状況下にあったことを暗にしめしてはいるものの、惜しくもその当時

の状況を詳細には記述していない¹⁴⁾。

次節では、そもそもこの行列がどのように報道されていたものであったのか、当時の朝日新聞紙面を確認すると共に、行列への当時の朝日新聞の見解も参照していきたい。

3. 神田岩波書店前, 1947年7月19日午前2時

そもそも、事の発端となる西田幾多郎全集徹夜購入行列の朝日新聞報道がどのようなものであったのかについて確認したい。

朝日新聞の1947年7月20日2面では、「ねむい西田哲学」と題されるとともに、行列の写真が掲載されている(図1)。記事では、西田幾多郎全集第一巻七千部のうち二百五十部が十九日午前八時に神田岩波書店から発売されるので、「三日前の十六日夕方には、はやくも角帽組が店にあらわれ、十八日朝までには“永遠の相”にとつつかれた人たちざつと二百人がかくのごとく行列、イスを持出したり、交代で食糧補給やら、なかには売り飛ばすのが目的だというのもあるはず(写真は十九日午前二時の岩波書店前風景)¹⁵⁾」としてやや揶揄気味に報道されていることがわかる。なお、角帽組は当時の大学生の集団を意味する。記事本文に忠実に読む限り、「教養への憧れ」や「活字への飢え」といった解釈が入り込む余地がないように思われる。また、前節で確認したような行列写真に関する言及は、写真の光景そのものには言及するものの、その写真を掲載した記事がどのようなものであったのかについて注意を払っていない¹⁶⁾。少なくとも、記事本文では活字への飢えや教養主義といった観点は一切記されておらず、それどころか転売目的ではないかという予想が述べられている点に着目したい。

次にはこの行列にかんして言及する、1947年7月30日の朝日新聞「天声人語」欄を見ていきたい。「天声人語」は、この行列を以下の様に厳しく批判している¹⁷⁾。

西田幾多郎全集第一巻が売出されると、二百人の学生たちがわれ勝ちに殺到して、四日三晩、本屋の店頭に行列で座り込んだ(引用者中略) 哲学書もモノの一種だといってしまえばそれまでだが、ベルリンやハイデルベルクで、ヘーゲルの著書を買うために、学生たちがこんな真似をしたという話はないぞ聞いたことがない(敗戦後の混乱した世相の中で、若い人々が精神生活の確実な支柱を哲学に求めようという気持は分るが、さればといって、この狂

熱はいささかはげしすぎる。少なくともはなはだ非哲学的であることは確かである(西田博士が西洋哲学から出発して東洋風な思想を組織化した大であり、わが国哲学界の最高峰たることにだれしも異論はない(引用者中略)「西田哲学」を伝説化し偶像化することになった(「西田哲学」だけが哲学ではないという簡単なことをまず知らなければなるまいが、今日の日本人にとって「西田哲学」が今後においても指導原理として役立つかどうかとも、根本的に再検討される必要があろう¹⁸⁾。

行列を報道した当の朝日新聞において、この行列が「狂熱」あるいは「非哲学的」として批判されている点が、前節でみたような諸解釈と著しく異なる点である。ここでもやはり、活字への飢えや教養は直接の論点ではなく、むしろドイツでは起こりえないような事態が日本で発生する異様さを訴えかけている文章になっているといえるだろう。

そして、そもそもこのような行列が起こる当時ではどのような状況であったのか。次節では『西田幾多郎全集』購入徹夜行列をめぐる歴史的状況について、当時の出版市場について着目しながら、『西田幾多郎全集』発売をめぐる力学を明らかにしていきたい。

4. 『西田幾多郎全集』購入徹夜行列をめぐる歴史的状況

A. 偽『善の研究』の流布

最初に確認しておくべき点は、終戦直後という特殊な歴史的状況において、『善の研究』の偽本が数多く流布していたという点である。

岩波書店が刊行した『写真でみる岩波書店80年』では、「1946年6月 この頃、西田幾多郎『善の研究』海賊版あらわれる」として、すでに前年の1946年時点から『善の研究』海賊版が問題となっていたことがわかる¹⁹⁾。この海賊版は「終戦直後に現れた『善の研究』(西田幾多郎著、岩波書店発行)の長野偽版」として知られている²⁰⁾。海賊版は、装幀・奥付とも全く同じ偽書であり、信州を中心に作成され東京その他地域で販売された²¹⁾。

たとえば、1947年の読売新聞は、神田の書店へ「西田幾多郎著“善の研究”の残部が若干あるから一部百廿円(定価は十五円)で譲る」との書状とともに、『善の研究』の海賊版が販売されていた事件を報道している。報道によれば、数十冊の偽『善の研究』が岩波書

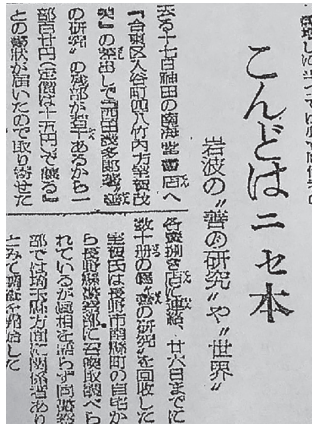


図 2 偽『善の研究』の報道

店によって回収されたという (図 2)²²⁾。このように、『善の研究』は終戦直後期においては、海賊版が多く流布する状況にあったといつてよいだろう。

B. 投機的商品としての古本・店舗販売のみの販売体制

終戦直後期 (1945-1947年) は戦中の検閲がなくなり、占領政策の方針と反しない限りであるものの出版の自由を得ることが出来た。結果、出版物の氾濫が起り、「紙に印刷されているものなら、何でも売れた」時期であったことがよく知られている²³⁾。新たな作品・書籍の執筆が困難な状況下において、手早く確実な出版手段はかつての名著の再発行であった。例えば 1946年には著作権の切れ目を狙い、岩波書店の『漱石全集』に対して桜菊書院が『夏目漱石全集』を刊行し、売り上げを伸ばした²⁴⁾。

このような歴史的状況において、古書の販売も同様の環境にあった。一例として、読売新聞の神田書店街の古書店店主 (インタビュー当時50代後半) に対する 1970年のインタビュー記事では、終戦直後の出版市場について、『善の研究』が非常な売れ行きを見せ、「店頭価格百五十円の『善の研究』が、その日の昼過ぎに二百円、夕方には三百円と、一時間ごとにプレミアがついた」として回想がなされている。同記事では、終戦直後の古本市場の「救いの神」として、「べらぼうな財産税を課せられた斜陽族が、蔵書を売りに出した」ことによって、神田書店街が活気を取り戻したことも記されている²⁵⁾。

岩波書店の社史である『岩波書店五十年』では、1947年7月は「出版物の絶対量の不足と運賃その他の高騰による地方の一部小売書店は定価の10%増販売

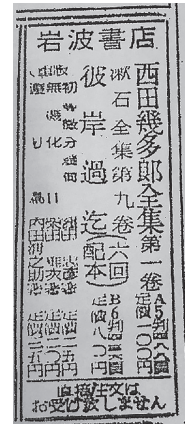


図 3 1947年7月18日の『西田幾多郎全集』広告

をなす」という出版市場の状況であり、1947年9月12日には日本出版協会が「激化するインフレ下、出版物の適正価格維持のため出版物価格委員会を設置」するにいたったことが記されている²⁶⁾。

なお、1947年の年間刊行数は73点、単行本が27点、文庫が13点、叢書が7点、全集が26点であり²⁷⁾、『西田幾多郎全集第一巻』の定価は、終戦時から1947年7月までの岩波書店刊行物の間で二番目に高いものであった²⁸⁾。

最後に確認しておきたい点は、この『西田幾多郎全集第一巻』は、注文が不可能であり、現地店舗販売で入手するほかない状況にあったという点である。行列の前日である1947年7月18日の読売新聞朝刊一面には、次のような『西田幾多郎全集第一巻』の広告が掲載されていた (図 3)。

「岩波書店 西田幾多郎全集第一巻 A5判488頁 定価100円「直接注文はお受け致しません」という簡潔な広告であるが、直接注文が不可能である点が明記されている点が特徴である²⁹⁾。終戦直後期である以上、不可避の対応であったと考えられるが、偽『善の研究』が流布し出版物一般が高騰するなか、『善の研究』を収録した最新の『西田幾多郎全集第一巻』が現地店舗販売限定という形で発売される。このような状況が成立していたのであった。次に、『西田幾多郎全集第一巻』購入徹夜行列を考えるにあたって重要な点は、そもそも『善の研究』および西田幾多郎がどのような存在として受容されていたのかを明らかにすることであろう。次節では、1911年に弘道館より出版された『善の研究』は戦後にいたるまでどのような書籍として受容されていたのか、そして1945年に没した西田幾多郎はどのような存在としてマスメディアに描かれ

ていたのか、あるいはどのように受容されうる存在であったのかについて検討していきたい。

5. 戦中・戦後直後期における西田幾多郎『善の研究』の位置

A. 教養の古典としての『善の研究』

まず、『善の研究』という書籍がどのように受容されていたのかについて、検討していきたい。1911年（明治44年）に出版された『善の研究』は、その難解さで知られるとともに、旧制高等学校の学生や大学生をはじめとして知識階層にとってはある種の必読書としても受容される存在であった。

この点に関しては、筒井清忠が日本の教養主義について検討する中で、戦前期の学生の多くが『善の研究』を手にとったことを明らかにしている。たとえば、1938年の文部省による読書調査においては、「最近読みて感銘を受けたる書物」（全7167票）の質問項目の中で、西田幾多郎『善の研究』は101票を集めて7位（『三太郎の日記』は117票で6位）となっていた³⁰⁾。また、1946年4月の日本読書新聞による読書調査では、「感銘を受けた書物名」（総数4246票）では『善の研究』が547票を集めて1位に輝いており、1948年の松山高等学校での読書調査の質問「特に感銘を受けた書物」においても、『善の研究』が1位となっていることが指摘されている³¹⁾。

もちろん、多くの学生が手に取ったからといって『善の研究』の内容が理解されていたと考えることはできないものの、『善の研究』という書籍名は多くの人々にとってよく知られていたものであったとみなすことができるだろう³²⁾。また、上述の調査結果は、そもそも『西田幾多郎全集第一巻』発売前にすでに多くの『善の研究』が図書として流通していたことを示唆している³³⁾。

B. 戦中の西田幾多郎とそのイメージ

西田幾多郎には、戦時中において、日本独自の哲学を提示する指導者として担ぎ出される側面もあった。例えば、朝日新聞1940年1月1日には、朝日新聞社記者が年頭の辞を西田幾多郎に求めて取材するが、「年頭の辞をいへというのかそんなことは応じられない。新東亜建設の哲学的裏づけといへばさらにむづかくなる。（中略）僕は軽々しく物は言へないのだ」として断られている様相が、報じられている。しかし、軽率な発言を行わない西田幾多郎自身のインタビュー

内容とは異なり、見出しは「創造だ！新しい世界へ黎明に叫ぶ西田博士」と扇動的に記されている³⁴⁾。

このような受容は極端ではあるものの、実際、西田幾多郎は戦時において否応がなく時局・政治と関わらざるをえない立ち位置にあった。近衛文麿は西田の教え子であり、高坂正顕ら京都学派の哲学者らも日本海軍のプレントラストとなり、それには加わらなかった西田も戦争ならびにそのプロパガンダに巻き込まれていく。西田幾多郎自身は1941年に昭和天皇に御進講を行い、1943年には「世界新秩序の原理」を執筆するに至る³⁵⁾。

1945年6月に西田幾多郎は他界するが、新聞死亡記事では「わが国哲学界の重鎮で『西田哲学』とまで称せられる独創的な哲学体系を確立し、世界思想界に偉大な貢献をなした³⁶⁾」と報じられている。このように、戦時下において西田幾多郎は日本における世界に通用する哲学者でありかつ日本独自の哲学を有する人物としてマスメディアでは受容されていたといえるだろう。もちろん、このことは西田哲学が理解されていたという話ではなく、あくまでも西田幾多郎あるいは『善の研究』といった固有名詞が、ある程度広く知られていた状況にあったということを示すに過ぎない³⁷⁾。

6. 検討・『西田幾多郎全集』購入徹夜行列とは何だったのか？

これまでの検討で明らかになった点についてまとめ、『西田幾多郎全集』購入徹夜行列をどのように解釈しえるのかについて考察を行ってきたい。

本稿の検討で明らかになった点は、大きく以下の4点にまとめることができる。

1. 行列を報道した朝日新聞は、行列に批判的であり転売を危惧していた。
2. 当時、『善の研究』の海賊版詐欺や古本の高値転売が横行していた。
3. 岩波書店が、直接注文不可の現地店舗直販体制で販売していた。
4. 西田幾多郎が、戦中においても哲学のスターとして祭り上げられていた。

以上の諸点を踏まえると、『西田幾多郎全集』購入徹夜行列とは、出版物が高騰し古書の高値転売が横行する市場下において、転売目的で並ぶ多くの人々によって形成された行列であった、と捉える仮説を提示することができるだろう。

もちろん、本稿の検討によってこの仮説を確認できたとはいえ、人々が「活字への飢え」や「教養」から行列を形成したという従来の解釈が完全に反駁されたわけではない。とはいえ、『善の研究』を読みたいというだけならば、そもそも『善の研究』は1911年の発売以降広く流通していたのであり（1911年に弘道館から、1921年に岩波書店から発売された）、全集に収められた『善の研究』を求める必要性は高くない。

「活字への飢え」あるいは「教養」といった従来の解釈では、なぜ1947年時点において、1911年刊行の『善の研究』が収められた『西田幾多郎全集第一巻』がわざわざ求められたのかを説明することができない。仮に本当に「活字への飢え」であれば、戦中において検閲・発禁され読むのが困難であったマルクス主義・共産主義の文献か、あるいは敵対国であったアメリカ・ヨーロッパ諸国の著作の方がより求められたのではないだろうか。

従来の解釈に対して本稿は、1946年時より『善の研究』の海賊版が各地で作成され1947年には『善の研究』海賊版を用いた詐欺事件が発生していたこと、『善の研究』をはじめとした古書の定価以上の高値転売が横行していたこと、『西田幾多郎全集第一巻』は直接注文が不可能であり現地店舗購入を行う必要があったことを明らかにした。

これらを踏まえて本稿は、『西田幾多郎全集』購入のための徹夜行列は、「転売目的」で現地店舗でしか購入できない本書を購入しようとした人々によって形成された行列であった蓋然性が高い、として結論付けたい。むしろ転売目的であったがゆえにこそ、終戦時点においてもある程度流通していたであろう『善の研究』が収められた『西田幾多郎全集第一巻』を、路上で徹夜してまで購入する動機につながったのではないだろうか。

7. おわりに

本稿の議論は、終戦直後に人々がなぜ『西田幾多郎全集第一巻』を購入するために行列を作ったのか、その背景となる歴史的状況を考察するものであったと言ってもよいだろう。従来の「活字への飢え」や「教養」といった解釈は、端的に言えば、『西田幾多郎全集第一巻』発売時の具体的な歴史的状況を捨象している³⁸⁾。活字によって飢えを充たしうる手段が存在したがゆえに、このような奇妙な事態が起こり得たのではないだろうか。

すでに1949年の時点で、唐木順三は『現代史への試み』のなかで「哲学と教養との無媒介な融合は今日にいたるなほ盛んである。西田幾多郎全集発売に当って書店の前に徹夜して先を競う学生群と闇ブローカー群。哲学書の古本の異常な高値³⁹⁾」と記している。本稿はこの背景を探索するものでもあった。

『西田幾多郎全集第一巻』への行列とは、転売目的の人々が多く加わり形成された行列であった。あまりに身も蓋もない本稿の結論・解釈であるが、単に「活字への飢え」や「教養」と解釈するよりは、当時の出版・哲学・経済の状況を多角的に踏まえた解釈であるといえるのではないだろうか。そして本稿の結論は、当時の状況の多角的な検討をないがしろにしてまでも、「飢えの時代にあっても、高尚な哲学書を教養のために人々は追い求めたのだ/そんな時代があったのだ」と思い込みたい教養（教養主義）の呪縛の強さを、明るみにするものでもあったのではないだろうか。

注

- 1) 小澤実, 2017. 「偽史言説研究の射程」小澤実編『近代日本の偽史言説 歴史語りのインテレクチュアル・ヒストリー』勉誠出版, p. 2.
- 2) 朝日新聞1947年7月20日2面。
- 3) 若松英輔, 2019. 『善の研究 100分de名著』NHK出版, pp. 15-16.
- 4) 津野海太郎, 2016. 『読書と日本人』岩波新書, p. 185.
- 5) ジョン・ダワー, 三浦陽一・高杉忠明訳, 2001. 『敗北を抱きしめて 上』岩波書店, p. 235.
- 6) 奥武則, 2018. 『増補 論壇の戦後史』平凡社, pp. 53-55.
- 7) 小熊英二, 2002. 『〈民主〉と〈愛国〉』新曜社, p. 86.
- 8) 半藤一利, 1996. 「空前の「哲学の時代」」毎日新聞社編『岩波書店と文芸春秋』毎日新聞社, pp. 48-49.
- 9) なお、この半藤一利の間接的な引用が、西田幾多郎全集購入行列を象徴するものとしてさらに引用されることも多い。しかし、この鷺尾の証言の直接的な出典は、鷺尾洋三, 1972. 『忘れぬ人々』青蛙房, pp. 264-265である。当該箇所でのこの行列を鷺尾自身は「昭和二十一年 [1946年] の或る朝」として記しており、証言の確実性としてはやや疑義が残る。
- 10) 福岡良明, 2020. 『「勤労青年」の教養文化史』岩波新書, pp. 42-43. なお本書の図1-8および帯では、この行列を「1947年7月10日」のものとしているが、これはいずれも「1947年7月19日」の誤り。
- 11) 大橋良介, 2013. 『西田幾多郎 本当の日本はこれからと存じます』ミネルヴァ書房, pp. 288-289.
- 12) 佐藤卓己, 2013. 『物語岩波書店百年史 2 「教育」の時代』岩波書店, p. 244.
- 13) なお『野呂栄太郎全集』は全4巻を予定していたものの、占領軍当局の検閲によって、第二巻以降がほぼ全面削除され、第一巻

- を販売して中断することとなった。参照、岩波書店編、1987、『岩波書店七十年』岩波書店、p.257.
- 14) なお、古書転売目的について述べる数少ない言及としては、桶谷秀昭、2003、『昭和精神史 戦後篇』文芸春秋、pp. 121-122も参照。
- 15) 朝日新聞1947年7月20日2面。
- 16) 記事本文までを含めた行列写真を提示する（つまり記事紙面そのものを提示する）文献として、上山春平編、1970、『日本の名著47 西田幾多郎』中央公論社、p. 19.
- 17) この1947年7月30日の朝日新聞「天声人語」における行列批判について、間接的にでも触れたものは、管見の限り坂本慎一、2011、『戦前のラジオ放送と松下幸之助』PHP研究所、第4章注釈35、p. 328のみ。
- 18) 朝日新聞1947年7月30日1面。
- 19) 岩波書店編集部編、1993、『写真でみる岩波書店80年』岩波書店、p. 98.
- 20) 米川猛郎、1976、『著作権へのしるべ 著作権と図書館』日本図書館協会、p. 156.
- 21) 『岩波書店七十年』、p. 255.
- 22) 読売新聞1947年9月27日2面。
- 23) 日本出版学会編、2022、『パブリッシング・スタディーズ』印刷学会出版部、p. 95.
- 24) 橋本求、1964、『日本出版販売史』講談社、pp. 615-616。また、この点を指摘する同時代文献として、山田坂仁、1948。「出版に於ける“西田山脈”について」『書評』、3(2)、pp. 4-10.
- 25) 読売新聞1970年8月10日夕刊6面。
- 26) 岩波書店、1963、『岩波書店五十年』岩波書店、p. 259.
- 27) 同上。
- 28) 一番目は宇井伯寿『仏教汎論 上巻』が150円。同年5月5日に刊行された『漱石全集 第八巻』で60円、7月5日の『漱石全集 第九巻』で80円であった。参照、同上、pp. 250-256.
- 29) 読売新聞1947年7月18日1面。
- 30) 筒井清忠、2009、『日本型「教養」の運命』岩波現代文庫、p. 72.
- 31) 同上、pp. 80-81.
- 32) 『善の研究』が実際どのように読書されていたのかについて、追跡を行うことは非常に困難であるが、同時代の学者らがどのように読んだかについては、以下を参照。藤田正勝編「アンソロジー 『善の研究』はどのように読まれてきたか」藤田正勝編、2011、『『善の研究』の百年 世界へ／世界から』京都大学学術出版会、pp. 95-103.
- 33) たとえば、筆者の所蔵する5冊の『善の研究』（岩波書店刊行）において、刷数はそれぞれ以下の通り。
- ①大正10年3月18日発行、大正11年 [1922年] 8月24日68刷発行
 - ②大正10年3月18日発行、大正13年 [1924年] 5月10日109刷発行
 - ③大正10年3月18日発行、昭和4年 [1929年] 4月30日166刷発行
 - ④大正10年3月20日発行、昭和16年 [1941年] 4月10日41刷発行
 - ⑤大正10年3月20日発行、昭和17年 [1942年] 3月20日42刷発行
- なお、「序（明治44年1月）」、「再版の序（大正10年1月）」、「版を新にするに当って（昭和11年10月）」が序文として存在する。上記の通り、戦前期から戦時下においても、すでに大量の『善の研究』が流通していたであろうことは明らかである。
- 34) 朝日新聞1940年1月1日7面。
- 35) 戦時下の西田幾多郎については以下を参照した。小林敏明、2017、『夏目漱石と西田幾多郎』岩波新書、pp. 173-182; 小林敏明、2011、『西田幾多郎の憂鬱』岩波現代文庫、pp. 296-356; 大橋良介、2001、『京都学派と日本海軍』PHP文庫。
- 36) 毎日新聞1945年6月9日2面。
- 37) 読売新聞1947年7月7日2面の中村哲（法政大学教授）「思想の追放」では、「三十代といわれるものが思想的には如何なるものの影響をうけているかといえば、知識階級一般については、ジャーナリズムの関係から西田哲学の影響がつよいが、それも西田博士の哲学体系というよりは、戦争と結びついていた西田哲学の亜流の時局物である」として、厳密ではない「西田哲学」イメージが戦争と結びついた形で流布していた点を指摘している。
- 38) 戦後直後の出版ブームを単に「活字への飢え」や「教養」といった解釈枠組みで捉えることの問題点については、藤井淑禎「戦後のベストセラー 読書ブームと名作ブーム」、筒井清忠編、2022、『昭和史講義 【戦後文化編】 上』ちくま新書、pp. 103-106も参照
- 39) 唐木順三、1949、『現代史への試み』筑摩書房、p. 200.

(受入教員・山名淳教授)